

一 次のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 彼はとてもハクシキな人だ。
- ② 体調が悪くてサムケがする。
- ③ 彼の努力はトロウに終わった。
- ④ 不良品をジョガイする。
- ⑤ 五月三日はケンポウ記念日だ。
- ⑥ 畑をタガヤしてさつまいもを植える。
- ⑦ ひもをタラしてみる。

二 次の□には共通の言葉が入ります。それぞれ漢字一字で答えなさい。

- ⑧ 苦労した□げ句病気になる。
入学式を□行する。
分かりやすい例を□げた。
考え方の□底にある精神。
- ⑨ 規則に□づいて判断しよう。
人間愛を□調とした文学作品。
後世に□を残すことをしなさい。
- ⑩ 学校の□折れになる行い。
□声が世界にとどろく。

三 主人公の「ぼく」(渚)は、小学六年生。彼のクラスの男子はたいへん仲が良く、クラスのお別れ会の出し物として、みんな映画を撮ることになった。「ぼく」の役割は監督。台本も「ぼく」が手がけていた。そして「ぼく」が中心になって映画

で取り上げることに決めたのは、都市伝説の怪人「仮面のピーターパン」。彼は子供たちをさらっては、その子を今とは別の時間——子供たちが「あのときがいちばん良かったな」と思っている時間に送りこんでしまうと言われていた。はじめ映画作りは順調に進んでいた。しかし、撮影が進むうち、「仮面のピーターパン」の目撃情報が何度も寄せられ、気味悪がった子供たちは次第に撮影から遠ざかっていった。さらに中学受験をひかえた子供たちが、家からの反対もあって次第に活動から離れていく。中学入試を終えた後も彼らのチームワークは回復することがなく、ギクシャクした状態が続く。そんなある日、クラスの中の一人である「ジーエム」が家から姿を消してしまう。「ぼく」はクラス仲間の一人である岡崎とともに「ジーエム」を探し、ようやく学校の屋上に「仮面のピーターパン」の衣装に身を包んだ「ジーエム」を発見するのだった。本文は、それにつづく場面です。読んで、あとの問いに答えなさい。

「これはこれは渚くん、よくぞここまでたどり着いたね。そう、この僕こそが仮面のピーターパンの正体さ」
しだいに呼吸が落ちてきた。今さっきのジーエムの言葉の意味も理解できないまま、ぼくは荒い息とともに問いかけた、
「こんなところで、なにしてるんだよ。そんな格好で」

「ふうむ、僕としてはきみがどうやって校舎内に侵入したかのほうが気になるのだがね。ああ岡崎くんがいっしょだということ
は僕と同じ抜け道を使ったのか。いやいやまったく、この学校の防犯体制のずさんさといったら実に噴飯もののだね」

ジーエムは露骨に話をそらした。いつもと変わらない口調。受験が終わって以降、二人で帰ったことはなかったから、ジーエムの声を聞くのは本当に久しぶりだった。その声を聞いたとたん、さんざん心配させたことを責める気持ちも怒る気持ちも、どこかへ消えてなくなってしまった。

「もういいから、いい加減その仮面外したら。なんか話しくいんだけど」

① ぼくの質問とは無関係な話を早口で続けるジーエムに、ぼくは苦笑して言った。するとジーエムはふうむと考えこむしぐさをして、「いや、申し訳ないがそれはお断りしよう。妙な誤解を受けそうだからね」

「誤解？ どういう意味さ」

「だからね、僕は不覚にも、ついさつきまでここで熟睡していたのだよ。今数分前に目が覚めたばかりなんだ。ゆえにだね」
ジーエムが何を必死になっているのかわからなかった。ぼくが首をかしげていると、ジーエムはあきらめたようにため息をついて仮面を脱いだ。仮面の下に現れるジーエムの不機嫌そうな表情。その目が、泣きはらしたあとみたいに真っ赤になっていた。

② ぼくは息をのみこんだ。ジーエムが怒ったように言った、

「渚くん、再度言うておくが目が赤いのは寝起きのせいだ。断じてきみが今現在妄想しているような理由ではない」

それを聞いて、ぼくは思う。ジーエムは、意外とこういう嘘が下手だ。

「A」が詰まるという言葉は、きつと今のぼくのような気持ちを言うんだらう。ぼくはジーエムに言った、

「——ありがとう、ジーエム」

「なんだい突然礼を言ったりして。調子が狂うじゃないか」

相変わらず不機嫌な声で、ジーエムは言った。ぼくはそれ以上、ジーエムの赤い目についてはなにも尋ねないことにした。

ぼくは言った、

「それで、さっきの話、僕こそが仮面のピーターパンの正体だ、って……」

「うん？ つまり言葉どおりの意味さ。夜な夜な怪人の扮装で皆の前に現れては謎を振りまいていたのはこの僕だよ。どうだい、なかなか刺激的だったらう？」

ぼくは、とっさに言葉が返せなかった。だって、ジーエムはそんな子供じみた悪戯の犯人像とは、一番遠いところにいたから。

「ジーエムが仮面の怪人って、じゃあ、あの教室の様子が新学期のころに戻っていたのもジーエムがやったわけ？」

「そう、あれは絶望的な気持ちになったね。一晩かけてなんとか作業を終えたというのに、誰もあの事件を仮面のピーターパン

と結び付けてくれないのだから」

「じゃあ、ぼくが見た怪人も——」

「なんだ、きみも見ていたのかね？ でもそれは本物だよ。僕がわざわざ正体を見破られそうな相手のところに姿を現すと思うのかい。しかしまったく、きみのところに現れて、僕の前には姿を見せないとは」

③ どうにもうまくいかないものだね、とジーエムは言った。

冗談めいた軽い口調の中で、その言葉には別の響きがあった。それを聞いて、ぼくはジーエムがどうしてそんなことをしたのか、なんとなくわかってきた。ジーエムはたぶん、みんなを怖がらせようとか、小学校生活の最後に、小説みたいな魅力的な事件を起こしてみんなの記憶に残そうとか、そういう理由で怪人のまねを始めたんじゃない。

ぼくはいつかのジーエムの言葉を思い出して言った、

「ジーエム、前に言ったよね。みんなが信じたり願ったりすれば、本物の仮面のピーターパンが現れるって。あれは、冗談じゃなかったんだね」

ジーエムは答えなかった。ぼくも黙ってジーエムを見つめた。二人きりの屋上には、風の音しか聞こえなくなった。

きつとジーエムもぼくと同じ気持ちだったんだと思う。中学に進学して、みんなと離ればなれになるのが嫌で、それで仮面のピーターパンに会いたかったんだらう。だから怪人の格好でみんなの前に現れて、みんなに怪人は実在すると思わせようとした。そうすることで、都市伝説の怪人が現実に姿を現すと、ジーエムはそう信じたのだ。

ジーエムはやがて大きなため息をつく、「やれやれ、すべてお見通しというわけかい」と苦笑した。

「ジーエム……」

「べつに、そんなことを本気で信じていたわけではないよ。今だって、こんな格好をしたところでなんの意味もないことは理解している。ただそれでもね、④ どうにもならないことをどうにかしたくて、なにかをせすにはいられなくて、結局なんともくだらないことを始めてしまったというわけさ」

ジーエムは、ぼくに背を向けて続ける、

「渚くん、これは僕のひとり言だから聞き流してほしいのだがね。最初に出会ったときから、僕はきみや岡崎くんと過ごす時間を本当に大切に思ってきたんだよ。僕はこんな人間だからね、きみたちと会うまではずっと一人だったし、卒業してきみたちと別れば、また一人になる。だから、僕はきみたち二人と、それからうちのクラスの面々との楽しい日々が、ずっと続けばいいのにと、いつまでもこのまま変わらなければいいのにと、柄にもなく思ってしまったんだよ」

ぼくはジーエムに言葉をかけることができなかった。いつまでもこのまま変わらなければいいのに。ジーエムの言葉は、ぼくの言葉だった。

ジーエムはこちらに背中を向けたまま、ふう、と「B」に息を吐いた。

「だが、すべてしかたがないことさ。残念ながらね」

ジーエムにかけける言葉が見つからず、ぼくは黙りこんだ。

(如月かずさ『サナギの見る夢』より)

* 原文を一部改めました。

※ 嘔飯……おかしくてたまらず、口の中の飯をふき出すこと。

問1 ― ①について、ジーエムはなぜ「ぼく」の申し出を断ったのですか。「それ」の指す内容を明らかにしながら、その理由を三十字以内で説明しなさい。

問2 ― ②のように「ぼく」がなってしまったのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを選んで、記号で答えなさい。

ア 仮面を外したら、ジーエムの顔があまりに恐ろしくて怖くなったから。

イ 仮面を外したら、その下から本当にジーエムが現れて驚いたから。

ウ 仮面を外したら、ジーエムが怒っていてその勢いに圧倒されたから。

エ 仮面を外したら、べそをかけたジーエムの顔が現れて意外だったから。

オ 仮面を外したら、不機嫌なジーエムの顔が現れて腹が立ったから。

問3 「」A、Bについて、以下の問いに答えなさい。

(1) 「」Aに入る言葉を漢字一字で答えなさい。

(2) 「」Bに入るのに適当な言葉を、次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 苦しげ イ 所在なげ ウ さびしげ エ 不満げ オ 自信なさげ

問4 ― ③について、このときのジーエムの気持ちを説明した次の文の()の中に、五十字以内で説明を補って文を完成させなさい。

* 仮面のピーターパンが、() ()ことを残念に思う気持ち。

問5 ― ④の響きとしてふさわしくないものを、次の中から選んで記号で答えなさい。

ア かなしい響き イ 重々しい響き ウ おだやかな響き

エ 暗い響き オ まじめな響き

問6 — ⑤について、以下の問いに答えなさい。

(1) 「そんなこと」とはどんなことですか。「そんな」が指し示す箇所を、「くこと」に続くように文中から二十五字以上三十字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

(2) ここで「ぼく」は、ジーエムがどのような気持ちで「そんなこと」をしたと考えたのですか。「ぼく」が推察したジーエムの気持ちが示されている一文を探し、最初の五字を答えなさい。

問7 — ⑥について、ここでジーエムが願っていたのはどういうことですか。四十字以内で説明しなさい。

くく

くく

四 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

タケ(タケノコ)の皮には殺菌作用があり、昔は、おむすびやだんごなどの食べ物を包んで持ち運ぶのに、なくてはならないものでした。ササの葉がお寿司のお皿にそえてあるのを知っていると思いますが、これも、お寿司を長持ちさせる効果があるからなのです。いまは形だけが残っていますが、自然の防腐剤として大いに利用されていたのです。

東南アジアのタイ、ベトナムなどでは、いまでも竹筒の中にお米を入れて炊く風習があります。そうして炊いたごはんはなかなかくさらず、一週間も保存できるそうです。

資材としても、かべの骨組み、てすり、床、ござ、天井のはり、支柱・洗たく・旗ざお、垣根……と、たくさん使われていました。

わたしが、やはり小学生のころ、家の近くの路地裏を、さお竹屋さんが「タケヤー サオ、サオ ダケー」と声を張り上げながら、竹ざおをかついで売り歩いていたようすをいまでも鮮明に覚えています。

そうです、当時は洗たくの物干しにはかならずといってよいほど、竹ざおが使われていました。古くなった竹ざおはたき火にくべ、焼いもをつくったりして、最後まで利用し、ごみにはなりません。木炭ほどではないのですが、タケを炭にした竹炭は燃料としても利用されてきました。

A、タケは最近、民芸品として、竹細工にわずかに利用されているだけで、大量に使う資材ではなくなりました。

その理由は、竹材にとってかわる資材がいろいろつくられ始めたからです。代表的なのが、石油を原料とするプラスチックなどです。また、外国から輸入された価格の安い木材などです。プラスチックは大量に生産できて、価格が安いだけでなく、くさらないなどの利点から大量に使われるようになりました。

B、タケノコのような食用としての利用は、以前より増えているといえましょう。しかし、里山の竹林でタケノコを採る量は減ってしまっています。中国産などの安い輸入品のタケノコにとってかわられたからです。

こうして、現在、竹林やタケノコが、ほとんど利用されなくなったために放置されたモウソウチクやマダケなどの竹林が、周辺の森林の中にどんどん侵入^{しんぱう}しています。

タケは毎年、たくさんタケノコをのばし、それがそのまま、その年におとなのタケになります。C タケを切りだしたり、タケノコを採らなかつたりすると、毎年、その年に出てくるタケノコの数だけタケの本数が増加し、やがて竹林は人が入れないほど過密になり、暗くなってしまします。

そうすると、タケは竹林の外側の明るい方へ根をのばす性質がありますから、竹林が周辺にどんどん広がり、森林を竹林に変えてしまうのです。

過密になると、タケの一本一本が細くなり、また、タケノコが生えてこなくなります。そして、十年もたたないうちに枯^かれ始めます。ですから、過密だった竹林は、枯れ木（枯れ竹）の山になってしまいうけです。

枯れたタケだらけの山や、森林が浸食^{しんしょく}されて竹林になってしまった里山には、どのような問題があるのでしょうか。

タケは一本の桿^{※かん}から数本の地下茎を水平にのばしますが、地下茎の太さは二〜三センチメートル程度です。また、タケは桿の直下に、細い根をたくさん出します。それらのほとんどは桿の周り数十センチで、深さ二十〜三十センチメートルの浅い土壌^{どじょう}のところにかぎられています。みなさんも竹林に近づいて見てください。きつと、その周辺の道や畑を横切る、二、三センチメートルの節をもったタケの根茎を見かけることでしょう。

そのために、竹林は、地中深く、太い根をがっしりとのばす森林とくらべると、土をつかまえる力は強くありません。また、雨水をすみやかに土にしみこませてためる力も、森林よりも大きくありません。

そのため、竹林でおおわれた急傾斜^{けいしや}の斜面の山里は、大雨のときにはくずれやすくなってしまうのです。そうです。山崩^{くず}れや洪水^{こうすい}に弱い里山になってしまうのです。ですから、里山にこれ以上竹林がひろがったり、里山が竹林ですつかりおおわれることはさげなければなりません。④ 日本^④の山林を管理している林野庁も、この問題にたいへん頭をいためています。

なぜ、このように竹林が過密になり、周辺へと拡大しているのかは、すでにお話ししました。

D、竹林が利用されなくなったからで、建築資材として利用されていた竹材は、安い外国の木材やプラスチックにとつてかわられたため、竹林をきり出す量がめつきり減ったからです。また、安いタケノコが大量に輸入され始めたため、値が高くつく日本のタケノコは売れなくなり、採られなくなったからです。

こうして、里山に広がる竹林が利用されなくなり、放置され、人の手が入らなくなったのです。

最近、石油資源の行く末に対する不安や、地球温暖化など環境^{かんきやう}への配慮^{はいりょ}が求められるようになりました。便利なプラスチックは、くさらず、分解されませんので、処分するばあいに問題が生じています。燃やすと有毒なガスが発生するばあいもありますから、ごみ処理場の焼却炉^{しょうきゃくろ}のような排ガス処理能力をもつ高額な施設^{しせつ}が必要となります。埋め立て処分するにしても、その埋立地がなくなりつつあります。

そのような中で、最近、木材や竹材などの自然素材に対する関心が高まっています。とくに竹材から製造した竹炭の貯水力、保水力や、土の性質を変え、植物の成長を促進^{そくしん}する効果が注目され、竹材を新たに、大量に使用することに道をひらく用途^{ようと}として期待されています。

（中根周歩『竹炭の不思議な力』より）

* 原文を一部改めました。

※ 桿……タケの茎のこと。

問1 A〜Dにはどのような言葉を入れたらよいですか。それぞれ次から選んで記号で答えなさい。

ア	あるいは	イ	いっぽう	ウ	たとえば	エ	ところが
オ	つまり	カ	ですから	キ	結局	ク	そして

問2 — ①について、利点がそのまま問題点ともなっていることを説明した段落を探し、最初の五字を答えなさい。

問3 — ②について以下の問いに答えなさい。

(1) 森林が浸食されてしまう要因のうち、植物としてのタケの特徴とくちょうによるものを二つ、それぞれ三十字以内で説明しなさい。

(2) こういった里山のもつ問題のうち、最大のものは何ですか。十五字以内で答えなさい。

問4 — ③はどこにかかっていますか。次から選び記号で答えなさい。

ア 道や畑 イ 横切る ウ もった エ 見かける オ ことでしょう

問5 — ④について、筆者はある物が「この問題」の解決の糸口となると考えていますが、それは何ですか。文中からぬき出しなさい。

問6 本文ではタケの防腐剤としての使用例がいくつか紹介しょうかいされています。そのうちの二つをそれぞれ二十字以内で説明しなさい。

問7 本文の内容に合うものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア タケが日常的に使われていた時代は、環境問題も起こらず、里山も明るい雑木林ぞうきだった。

イ 竹林の放置がさまざまな問題を引き起こすことは明らかなのだから、日本人は多少値段が高くても、国産のタケノコをもつと食べた方がよい。

ウ タケの成長の速さは、国土の狭い日本せまのような国では迷惑めいわくなことであり、タケの成長に負けない植物を里山に植えた方がよい。

エ 日本のように急斜面が多い国では台風や地震じしんの時の災害対策としても、地下茎がしっかり根を張る竹林は大事にされるべきだ。

オ タケの持つ性質・特長をいかすことで、日本が抱える環境問題も解決される可能性がある。

カ このままタケが使われず、竹林が手入れされないでいると、結果的に大きな災害を生むかもしれないので、対策が必要だ。

キ 最近の安いものを大量に使うという日本人の考え方、生活の仕方は今や環境問題にまで発展しかねない大問題だ。